

有島武郎・森本厚吉著
『リビングストーン傳』(1901〔M 34〕年)を読む

——サムライ道徳と21世紀の『リビングストーン伝』——

杉山 直人*

Reading the Biography of David Livingstone
by Arishima Takeo and Morimoto Kokichi

——Samurai Ethics and Tim Jeal's Recent Livingstone Biography——

Naoto SUGIYAMA

要旨：120年ちかくまえに出版された本邦初の『リビングストーン傳』を2013年に出版された伝記(イエール大学)と読み比べた。有島の筆になる『傳記』にはピューリタニズムと通底する徳川時代のサムライ道徳が生きており、そのためリビングストーン(1813~73)は生身の人間というよりキリスト教的理想の体現者、実は朱子学がいう「理想の聖人」に祭りあげられている。徳川時代の遺産は明治末期にもしぶとく生き延びていたのである。

Abstract :

This notes is a comparative reading of two biographies dealing with David Livingstone. In 1901 Arishima Takeo in cooperation with Morimoto Kokichi published the first biography in Japan of this widely acclaimed missionary hero of the 19th century. He is depicted as an idealized "saint" under the influence of the supposedly defunct samurai ethics in the ending days of Meiji that correspond to the New England Puritanism introduced by American teachers into Sapporo Agricultural College where the two authors learned. Such an impeccable image is not offered in the other biography written by Tim Jeal published in 2013. As one of the most recent biographies from the Yale, it focuses on inevitable human aspects of this "hero" based upon the new researches unavailable to the Japanese students at the start of the previous century.

Since the collapse of the Tokugawa regime, highly educated, but unemployed samurais and their children searched for tools to help revive their prestige to open their future in the new age. English and Christianity were the answers they found viable. But the past cannot be so easily erased. Arishima's biography is an interesting evidence that shows Puritanical Christianity successfully replaced the samurai ethos because both of them shared the basic principles that can be found in the figure of David Livingstone.

キーワード：デーヴィッド・リビングストーン、有島武郎、キリスト教、サムライ道徳

*関西学院大学国際学部教授

第4版序文をめぐるには多くの研究がある。だが『リビングストーン傳』（以下『傳記』）本体となると話は別である。ために国会図書館蔵書検索システムで「リビングストーン 有島武郎」というふたつのキーワードを使って調べた。40件ほどヒットする（2017年7月25日）が、研究者による論考としては過去60年で3本くらいしかないようである¹⁾。現代読者には辛い漢文調で書かれていることも手伝って、本邦初の『リビングストーン傳』は不人気である。だが、あとの背教を念頭において読んでみると門外漢である私のような者にはおもしろい。「そうだったのか」という発見に出会うし、『惜しみなく愛は奪う』のなかで、なぜあれほど「偽善者」について作家は執拗に繰り返して語るのか、といった疑問にもヒントを与えてくれるから。

ただし、『傳記』を単独で紹介すると修身の教科書さながらになってしまう。それで2013年に最近の研究成果を踏まえてイェール大学から出版されたTim Jealの伝記*Livingstone*（『リビングストーン』増補改訂版）をも参照しながら、不人気な『傳記』を考えてみたい。ポイントとしては ① 儒教的サムライ道徳とピューリタニズム ② 理想化された探険家と現実の探険家とのギャップといったところである。

漱石が語る「昔の道徳」

「……昔の道徳はどんなものであるかと云うと、貴方（あなた）方もご承知の通り、一口に申しますと、完全な一種の理想的の型を拵（こしら）へて、其の型を標準として、又其型は吾人が努力の結果実現の出来るものとして出立したものであります、だから忠臣でも孝子でも若しくは貞女でも、悉く完全な模範を前へ置いて、我々如き至らぬものも意思の如何、努力の如何に依っては、此模範通りのことが出来るんだと云ったような教え方、徳義の立て方であったのです……」（『漱石全集』16・465）

奇しくも有島が札幌独立教会を去った翌年、

1911（M44）年に漱石が大阪で講演した「文芸と道徳」からのこれは引用だが、『傳記』執筆当時の青年、20歳すぎの有島がいだく道徳観、彼が理想とした人間観を考えるのに役立ちそうである。

「昔の道徳」とは徳川時代の道徳、儒教的サムライ道徳である。儒教の理想は「窮理」、つまり最高原理の理解であるとされる。（加地伸行『儒教とは何か』206）窮理実現のためには教育が重んじられる。自分が到達すべき理想の聖人（「共同体儀礼の熟達者、共同体道徳の最高体现者」が一般的という〔加地105〕）を模範に、例えば「孝・梯（長上者への敬意）・仁・義・礼」（加地106）といった徳目を身につけてゆき、それらを完成させるよう努めねばならない。みずからの意思に基づいてみずからの能力を駆使し実現にむけて努力する。そうすることによって「人間の理想像である聖人にかならずなることができる。」（加地206）

「かならずなることができる」というのがミソである。キリスト教では神と人とのあいだには絶対的な距離がある。仏教でも人は仏となり得る可能性はあるが、ながい時間をかけて輪廻転生を繰り返したのち、はじめて成仏できる。（加地106）ふたつと比べると儒教は常識的で近づきやすい。神仏でも超人でもなく、その意味でわかりやすい模範（理想の聖人）になれば良いからである。あの世のことに価値を置くのではなくて、日常的実生活における道徳完成をめざす。根底に死への洞察を備えてはいても、まずは社会規範や倫理道徳（これを礼教性という）を前面に押し出す宗教思想が儒教であるとされる。（加地24）

幕藩体制を支える支配イデオロギーとして江戸幕府が採り入れたのは、儒教のなかでも特に朱子学だった。朱子学は体制側に都合よくできており「社会秩序の妥協無い發揮を求める思想とされる」（土田健次郎『儒教入門』21）。基本的に静的要素が強かった江戸時代（大石慎三郎『江戸時代』213）の階級的身分社会を安定させるために、そ

1) 内田真木「有島武郎・森本厚吉のリヴィングストーン理解について」（2012）、尾西康充「有島武郎と内村鑑三『リビングストーン傳』第四版序言の根底にあるもの」（2011）、それに半世紀以上まえに雑誌『理想』（1960）に発表された文芸評論家瀬沼茂樹の「有島武郎-『リビングストーン傳』をめぐる-」

の構成員は与えられた身分（士農工商）と、どのような家に生まれたか（家格）によって人生が左右された。（大石 215）「父が父らしく、子が子らしく、君が君らしく、臣が臣らしい時」（土田 21）に社会は安定して繁栄する。組織を構成する各人には生まれながらに与えられた役割があり、その役割をそれぞれの持ち分にふさわしく発揮したとき、理想の「理」が実現する社会ができあがる、と説く。現状維持を重んずる保守的思想である。

自由な発想に基づいて個人が行動してゆくことで社会に多様性と活力が生まれ、社会全体も進歩する、と考える現代とは隔世の感がある。社会が規定する固定的枠組み（秩序）のなかに自分をはめ込んでゆく考え方だからである。だからこそ、漱石の言葉にしたがえば徳川時代は「個人に対する一般の倫理上の要求は随分過酷なもの」となり、「少しの過ちがあっても許さない」（16・466）傾向が生まれた。徳川時代に頻発した切腹を説明する理由だ、とも文豪はいう。

儒教的「理想の聖人」と ピューリタニズム

維新以来半世紀ちかくを経た明治末には、時代遅れとなっていたはずのサムライ道徳について解説した。なぜかという『傳記』を読む現代の読者は ①キリスト教解禁後の初期日本プロテスタンティズム、それもクラークが種をまいた札幌バンドに顕著なピューリタニズムの厳格主義²⁾と通

底する「昔の道徳」が、改宗前後の青年期有島を捉えており³⁾ ②このサムライ道徳を土台として築かれた明治キリスト教に心酔した青年が『傳記』でかたるのは、人間リビングストーンというよりも、青年の熱烈な信仰が生みだす理想化された「偶像」、儒教がいう「理想の聖人」そのものであることに気づくからである。

『傳記』がかたる探険家は、当時の有島がよしとする倫理をそのまま写し出す⁴⁾。執筆理由については有島・森本両名が冒頭に記している。リビングストーンのような「偉大高潔なる人物が」なごらく日本人に忘れ去られているのを座視できない、というのである。だが単なる紹介のために執筆したのではない。背教を明言したあとになって出版された第5版序文のなかで有島は、リビングストーンを語りながら「私（＝有島）自身の信仰を世に傳へたいと云う動機も小さなものではなかった。」と言っている。『傳記』ではだから、信仰をめぐってリビングストーンと自分自身のあいだを往復する作業が繰り返される。リビングストンの行動や言葉を自らの生き様と重ねあわせようとするのである。

共著者たちは自分たちの信仰が一般信者よりも、格段に優れたものだという確信があったらしい。有島以上に森本があからさまである。いわく（執筆理由は）「私共兩人ノ心中ニ赤誠ニ基督教信仰ガ盛ニ燃ヘタ結果、奮勵一番、此偉大ナル人格ヲ公ニシテ墮落シテ居ル社會ヲ戒メ⁵⁾、衰頽シテ居ル人心ヲ鞭正シ、併テ偽善者多キ基督教界ノ革

2) 蝦名賢造『札幌農学校——日本近代精神の源流』第2章「札幌農学校の開設—教頭クラークの教育実践—」、特に「イエスを信ずる者の契約」（pp.33-81）

3) 17歳のときに有島が発表した『此狐墳』や『斬魔剣』に描かれるのは、死をも恐れず忠孝に生きようとする「サムライ」の姿である。豪胆で大胆不敵ではあっても現代の価値観からすれば血生臭く、命が粗末に扱われるチャンバラ時代劇さながらである。

4) 有島が札幌で伝記執筆に没頭していた1900年頃、英米でもリビングストーン評価は現代以上に高かった。ビクトリア朝イギリス国民のあいだでは暗黒大陸にキリスト教の「光りと人道主義」とをもたらした偉人として、この稀有な探険家は崇拝を集めた。執筆のための資料といっても、そうした畏敬の念を背景に書かれた英米の伝記を二次資料として間接的に利用するしかなかった本邦初のリビングストーン傳が、この探険家を「偶像」に仕立てあげてゆくのは自然の成り行きではあっただろう。ただしわたしの関心は、わずかな時間のうちに異教徒有島が、なぜあれほどリビングストーンを尊崇することができるようになったのか、その変わり身の早さであり、サムライ道徳とピューリタニズムとの親和性である。

5) リビングストンのなかに有島が見たのは、「高遠莊嚴なる思想」をかたる預言者ではなくて、現実世界にたいしてダイナミックに働きかける行動者「實行の人」（筑摩版『有島武郎全集』7・74）としてのクリスチャンであった。『傳記』最終部（「攔筆之辭」）で彼は探検家の人生を、自身が唾棄すべきとみなした現世享楽主義と対比する。人生50年を「娛樂の神に與へ、肉欲の樂園を此地上に造」ろうとする暮らしぶりである。欧米ノ

新ヲ促サンガ為⁶⁾デアッタ。」(「第5版への序文」51⁷⁾) リビングストンを語りながら、ふたりは自分たちの(信じる正しい)信仰を語り、もって社会を矯正しようとした、という。『傳記』は伝記の域を超えていた。ふたりの若者が自分なりに信じた「キリスト教的理想」に基づく社会改革をも狙った警世の書物なのである。だが宗教によって社会を戒め改めさせるというのは、経済至上主義になれきった現代のわれわれとは異質の発想である。神政一致にもとづいた「理想社会」を建設しようというわけだが、経済社会システムを導入することによって急速な西洋化をめざしていた維新日本では支持者は少なく、多くの人びとは無関心だったのではあるまいか⁸⁾。

それはさておき『傳記』が示す「キリスト教的理想」を考えよう。冒頭「逸樂を愛する勿れ、神を愛せよ」というカーライルの「信条」と、リビングストンの生涯を語り尽くしていると二人の著者が考える「謹み働きて、神を畏れよ」という格言が掲げられる。現世的価値否定と信仰に基づく

勤労第一主義である。こうした立場を奉ずるふたりの筆から描きだされるのは、内村流に言えば勇ましいサムライ人生をおくった「實行の人」としてのリビングストーンである。「朴直純潔」にして「神を畏れ人を愛す」リビングストーンは、「仁人君子が見て以て」神に見捨てられた救いがたい暗黒大陸たる「亜非利加と、其土人とを捨つる能はざりき……辛酸多かりし修養の後、決然此煉獄の中に投じて、常に偉大高潔なる理想を奉じつゝ……遂に亜非利加を其双肩に負ふて之に斃れぬ」(7『自傳』76~7)とされる。『傳記』結語から、ふたりの著者(実質的執筆者は有島のほうだったようだが)がリビングストンの生涯と偉業をどう理解したかを確認しておこう。

リ氏が六十年間の生涯を觀るに、其煉獄は既に英國に於て、工場に紡績手たりし、紅顏の時代に始まり、後年頭上霜を戴きて、チタンボの僻落に溘焉(=たちまち)として永逝せし時に及べり。或は醫しがたき心霊の苦痛に

ㄨ 列強にならって20世紀を迎えた日本もまた、彼らとおなじ轍を踏んでいる、と有島が嘆く物質優先の快樂主義である。「文化の利器を濫用して、肉欲の快樂に耽り、黄金貴く、爵位重く、瑤臺玉楼の上、酒池肉林の豪快を争ひて、功利の主義は偏へに重せられ、驕恣華奢の狂態人をして羅馬末代の全盛を想はしむ」(7・76)と痛罵している。

『自傳』が執筆された明治33~4年といえ、第4次伊藤内閣の時代だった。輝かしい業績とは裏腹に、内閣総理大臣たる伊藤博文の漁色家ぶりは有名である。『自傳』は地上的快樂に溺れる筆頭に伊藤をあげている。いわく「俗人は地上に娛樂を求め、清士は天外より慰藉を得べし、慰藉は清士が其勤勞によりて神より得たる、恩恵ある天贈にして、娛樂は俗人が地球なる、悪魔の店頭より購い來れる不潔の商品なり。蓄妾の伊藤候を始め、朝野の貴顕紳士に於ける。」(7・138)

6) 社会矯正を『自傳』でこうして吹聴したのだから、『自傳』出版以降、模範的クリスチャンたらねばならぬ、という自覚はふたりに重くのしかかっただろう。

「完璧なキリスト者」たろうとして、自分がどのような行動をとったかを『惜しみなく愛は奪う』は赤裸々に語る。信仰に苦しんで不眠に陥った有島は自分の「罪」を人のまえに披露し、断食し、この作家に特徴的な潔癖さで「ひとりの女の肉をも犯さなかった。」(旺文社版19)、はては「自分の生命を好んで絶つものをも意としないかった」(19)とまで告白している。『惜しみなく愛は奪う』は自虐的なまでに自らが「偽善者」であると繰り返すが、その遠因のひとつは『自傳』のなかで、純粹と呼ぶにはいささか幼い若き日の情熱に任せた(独りよがりと言わざるをえない)日本社会批判だっただろう。

キリスト教信仰は「倫理と福音」、「律法と慈しみ」の両面を兼ね備えているが、有島の行動はことごとく律法的である。あくまで倫理的完成を目指そうとするものにみえる。福音を信ずることによってのみ、「神の義」に身を委ねることによってのみ、ひとは救われる、というプロテスタンティズムの基からは離れているようにしか、わたしにはみえない。そう考えると自らの一連の行動を彼が「精進」(19)と呼んでいるのもうなづけよう。サムライが武術に励むように、青年有島はキリスト教道に日夜邁進していたのである。

7) 国会図書館デジタルコレクションで公開されている1919年発行5版のうち「第五版への序文」に収録された「重版自序」(森本厚吉著)より引用 コマ番号38/179。(2017/7/25)

8) 『傳記』第4版序言には有島の反省がみられる。「リビングストーン傳を読み返して私が恥しさに堪えないのは、私が心にもない大言壮語を放つてある事だ。その時は仮令信仰あるものと自分を思って、眞面目に筆を執つたのだったとは云へ、今にして私は自分の輕率に呆れ返る。どうぞそれを許していただき度い。……」(筑摩版『有島武郎全集』7・381)

悩み、或は殆んど免る可らざる身軀の危機に陥り、食を断ち病に苦しみ、死に至らんとせしもの實に十數度の上に出づ。彼は亞弗利加の南端に上陸してより、辛酸苦楚の間に、能く深く内部に進み、西ロアンダより、東ザンベジ河口に至る大旅行をなして、東西両海岸の間に足跡を遍からしめ、尚北方に進んで、タンガニカ湖邊一帯の地を探り、或いは天文學に、或いは地質學に、或いは植物學に周到精細なる觀察をなして、科學界に至大の新知識を寄與し、ニャッサ、バングェオロ、モエロ、シルワ、ナミの諸湖より、ザンベジの上流、ビクトリア大瀑布の壯觀に致るまで、皆其發見する所に係り、新たに知られたる面積は、殆百萬餘方哩、其旅程は實に二萬九千哩の上に出づ。黒白人種が蒙りたる無形の利益は、暫く此に説かずとするも、物質的の効果に於て、能く他の旅行家の企て及ばざる所を成就せり。(7『自傳』218~9)

リビングストーンが探險した当時、中央アフリカの地理を西欧はまだ知らなかった。19世紀半ばになっても詳細は不明だったのである。東アフリカのナイル川水源、中部アフリカのコンゴ川水源、南東アフリカのザンベジ川水源は「いまだ神秘に包まれていた。」(『アフリカ大陸歴史地図』80)水源ばかりか流域についても未知だったから、リビングストーンは地図上の空白地帯を埋めるべく探險をつづけたことになる。だから誰が見ても偉業ではあるが、ビクトリア瀑布を頂点とする新発見自体よりも、探險家が苦難を重ねたことに若者は実はいっそう心動かされている。探險家の生涯をいろどるさまざまな「苦しみ」とそれを忍耐強く克服したことが、ふたりの若者を感動させたもつとも大きな理由となっているのである。

有島はリビングストンの人生を「煉獄」と呼んではばからない。探險家が天国に入って、その悦びに浸るために耐え忍ばねばならなかった浄化の

火、自らを浄めるための試練の期間が地上での生というわけである。

自らの生活をふり返ったりリビングストーン自身も、苦勞を単なる苦勞とは考えず、飛躍とそのちに訪れる悦びをもたらず原動力と感じてはいた。アフリカにあって「勤み働く人を輕蔑する者」を見た探險家は「卓越せる人」になるための条件として「懸命の労働」をあげている。いわく「必卓越の域に達せんと欲せば、幼少より、老命に至るまで、烈しく労働し、勉強せざる可らず、是實に余等がなせし所の者なり」(7『傳記』134)探險家のこの言葉に賛意をあらわした若き有島は、「人心の愚昧、偽善、滯漫、は是吾人の労働によりて啓發せんが為めに残されたる者にあらずや、不毛の山、荒涼の地、是れ吾人の労働によりて開拓せられんが為に、残されたる者にあらずや、労働をなさざる人に眞正の快樂は決して與へられず、如何なる方面に於いてするも可なり、吾人が眞正の天職と信ずる所に、唯粉骨碎身せば、無限の快樂は來たるべし、勞勉すること一日なれ、一日の快樂は來たり、勞勉すること一生なれ、永遠の快樂は、來たるべきなり……」(7『傳記』134)と意氣盛んである。天上における永遠の快樂を得るためには瞬時も休まずに働く必要があると言っているわけで、結論として「懶惰に過すべき時間は一秒もあらざるなり」、「世界には只一つの怪物あり、之懶惰の人なり」と語った(らしい)カーライルの生活信条が掲げられる。(7『傳記』104)評論家と探險家が、ふたりともども禁欲的価値観を共有していた、と有島・森本は拍手喝采するのである。

ふたりの若者は現世的楽しみや悦びに価値を認めていない。日常生活の人間的愚かさや怠惰も許そうとはしていない。唾棄すべき弱さであるとされる。そのようなものに囚われていては「永遠の快樂」を手にはできないから、という。厳格なのはいいとしても、これは融通のきかない旧約的律法主義とでもいうべきものだろう⁹⁾。同時にまた、

9) 青年時代の有島にとって聖書とはいかなる存在だったかを、後年彼自身の言葉で語ったのが「『聖書』の權威」(1916〔T5〕年)である。いわく「その頃の聖書は如何に強烈な權威を以て私を感動させましたらう。聖書を隅から隅にまですがりついて凡ての誘惑に對する唯一の武器とも鞭撻とも頼んだその頃を思ひやると立脚の危うさに肉が戦きます。」と。

厳格な道徳主義という点からみれば、幼い有島を育てたサムライ道徳のもつ峻厳さでもある。

世間一般の日々の暮らしぶりをこうして否定するいっぽうで、死後に約束されているはずの「永遠の快樂」をふたりは信じきっているのだから、キリスト教的幸福観をめぐっては揺るぎない楽天主義者である。そして楽天主義ということなら、自らの倫理的完成ということについても、ふたりは疑念をもっていないようである。そうでなければ「真正の天職と信ずる所」に「粉骨碎身」することで、ひとびとの心に潜む「愚昧、偽善、滯漫」を「啓発」できる、と高言することもあるまいから。

ピューリタニズム的リゴリズムという鎧のしたから、さきにふれた誰でも努力することで聖人になれるはずだ、とする朱子学的サムライ道徳が透かし見える。朱子学の最大の関心事は聖人になるための心の刷新である（土田 54）と同時に、個人の修養が社会的貢献へと連なることでもであるとされる。「個人の内面が道徳的に完璧であってこそ、社会への貢献も完全になるという思想をもっている」（土田 109）のである。ふたりの若者はリビングストンという「聖人」に自分自身を重なりあわせようとしている。探検家と同じように、みずからもキリスト教道徳の模範生となることで人びとを教え諭し、もって理想とする社会建設への確かな歩みをしるそうとする。維新以前にサムライたちを鍛えた精神的支柱としての朱子学思想は、ピューリタニズム的キリスト教道徳と重なりあい調和しながら、ふたりの若者たちを捉えていた。かれらの姿は天下国家を憂い、そのあるべき姿を論ずるという明治初期の若者たちとも相通ずるようである。

現代キリスト教は新旧を問わず、「倫理と福音」（「律法と恵み」）という基本的二項並置のうち、

福音（恵み）に力点を置く。だが初期日本キリスト教宣教はそうではなかった。『傳記』にうかがえるのは厳格な倫理主義を特色とする著者たちの信仰である¹⁰。自分は武士階級の生まれだから「揺籃の中からして余の生まれたのは戦うため、一生くるは戦うなり」（内村『余は如何にして基督信徒となりし乎』12）と自らの人生を規定して見せたのは内村鑑三だった。内村はキリスト教ばかりか、青年有島が少なくともある時期、人生の師とまで仰いだ宗教家である。維新後もサムライ・エートスを心に秘め、それを原動力の一部として日本独自の無教会基督教をひろめたこの宗教者とリビングストンは、青年の脳裏で重なりあったことだろう。

ジールの『リビングストン伝』 を読むと……

ふたりの自伝より 120 年あとに上梓されたりビングストン伝は「理想の聖人」とは微妙に異なる探検家の姿を紹介する。したたかな実務家として計画実現のためには「犠牲者」がでることをためらう人ではなかった。健康に恵まれた強靱な肉体をもち、不屈の決意に裏づけられた行動をとるのを常としたために敵もできやすく、反対者や自らの要求基準に届かない人たちへの配慮が欠けがちだった、という。先を見通すだけの冷徹な計算に基づいて行動する有能な人にはありがちのこうした弱点から、有島の崇拜する「聖人」もやはり例外ではなかった。現実のリビングストンは信仰に燃える純粹無垢の人だけではなかったのである。

生い立ちや思春期の暮らしについては『傳記』のとおりである。貧しい家庭に育った。故郷スコットランドは 18 世紀末から 19 世紀初頭にかけて「第二次囲い込み」が進んだ結果、大規模羊毛生産がもたらす利潤拡大を求めた地主たちは土地か

10 現世を「誘惑（悪）」の支配下にある世界ととらえ、聖書にもとづく信仰を武器としてその悪を克服しよう、というのが彼の「信仰」がもつ基本構図だった。エッセンスは「善と悪の戦い」ということになるから、ひいてはピューリタニズム的である。このエッセイは作家が 38 歳になって書かれている。20 年前の自分と自らの信仰をふり返った彼は、当時のように自分はもはや「ファナティックではなくなりました。」と自省する。気恥ずかしそうでさえある。（7・349）

10) 「明治の初めのキリスト教への入り方というものは、福音というよりも、非常に倫理的なものを中核にした唯一神というものを受入れたということではなかったのでしょうか。」久山康『近代日本とキリスト教 明治篇』（86）

ら小作人を追い出す。都市に流れ込んだ彼らは、劣悪な生活環境のもとで暮らすしかなかった。こうした小作人のひとりが祖父ニールでグラスゴーに落ち着いた彼は紡績工場に職を見つける。父デーヴィッドは紅茶の行商人だった。

一家は長屋住まいで両親と5人の子供が台所付きの一部屋に暮らした。水道はなく長屋の裏にあった離れ家式汲みとりトイレは悪臭が漂い、家主が禁じたにもかかわらず、農村の習慣が抜けきらない借家人たちは部屋でニワトリを飼ったという。リビングストーンは10歳になると綿工場で働きはじめる。朝昼の食事に半時間ずつ休憩があったほかは、雇われた大人も子供も朝6時から夜8時までひとしく働くような生活だった。都合一日13時間の過酷な労働である。立ったまま眠りだすほど疲労困憊し、おかげで多くの子供たちは「手足の奇形や発育阻害」に苦しんだ。

少年は猛烈ガリ勉だった。終業後8時から10時まで2時間、工場併設の夜学校で勉学にいそしむ。夜学校での学習で読み書き能力を身につけることのできた子供たちが10パーセントに満たなかったなか、父からすでに手ほどきを受けていたリビングストーンは初年でラテン語学習を開始した、という。帰宅後真夜中まで勉学ということも珍しくなく、心配する母に本を取りあげられた。(ジール7~9)

刻苦勉勵、精勵恪勤を地で行く生活である。成長に欠かせない「遊び」を知らぬ探検家の少年時代は、有島版『傳記』冒頭に掲げられた「逸楽を愛する勿れ」というモットーにふさわしく、感激性の有島がそこに「煉獄」の第一歩を見たのも頷けるかもしれない。そんなわけで21世紀のリビングストーン伝がかたる探検家のイメージが『傳記』とのズレを示し始めるのは、探検家としての活動開始後である。1841年初頭、南アフリカのケープタウンに到着したリビングストーンが、やがて義父となるモフィットの運営する伝道所があったクルマンに到着してからのことである。

奴隷制廃止のための近代的商業体制確立

伝道事業成就のために探検家が目をつけたのは、近代的商業体制を現地に根づかせることだっ

た。貿易と商業活動を強めて経済の近代化と活性化をはかろうとしたのである。そうすることで奴隷売買に頼ることの多い中央アフリカにおける部族社会のあり方が改められる、と考えた。われわれの言葉を使うと保護貿易ではなくて自由貿易を採り入れ、近代国家からはほど遠い旧態依然たる部族社会を支えてきた悪しき生活手段（筆頭が奴隷貿易）を断つことで住民の生活意識を変えようというのである。奴隷売買を核にした古い社会秩序にくさびを打ち込むことでキリスト教への関心を高めて改宗への道を開こうとした。「経済」が人びとに与える影響力に依拠して奴隷制廃止とキリスト教化を一石二鳥で達成しようとする目論見である。

リビングストーンはやみくもに伝道に没頭したわけではなかった。神の国をアフリカに実現するとはいっても、地上の現実を踏まえたうえのことだった。こうしたかれの現実的経済重視思想は、死後ほどなくして19世紀末列強による帝国主義的植民地建設事業とも接点をもってくることになるが、ここでは深入りしない。それよりも、当時アフリカで活躍していた多くの宣教師とリビングストーンとの違いとしてジールが強調する「宣教と経済」の一体化(ジール22~4)を、『傳記』のなかで有島が多くは触れていないことを確認しておきたい。

「バトカ台地」(“Batoka Plateau”)と「シャイア高地」(“Shire Highlands”)

商業活動が奴隷貿易廃絶に有効だとリビングストーンが考えた地域はふたつあった。それらの地域をめぐる『傳記』の情報提供は多くない。むしろわかりずらいからジール自伝に基づいて付け加えたい。リビングストーンの人柄についても同時に『傳記』を補足することができよう。

最初リビングストーンが考えたのは「バトカ台地」だった。(120ページ地図参照)現在のジンバブエとザンビア国境沿いにあるビクトリア瀑布の東、ザンベジ川北方に広がる高原地帯である。標高千メートル前後で白人が暮らすのに快適な気候だったという。土地も肥沃なので宣教師や商人たちが入植して交易施設を建設するのうってつ

けの土地だとリビングストンは考え、将来のイギリス植民地としての可能性も探った。調査のためにザンベジ川探険をイギリス政府に要請する書類のなかで、砂糖、綿花、藍、タバコなどを栽培してはどうか、と書いている。(ジール 149、192)

問題はふたつあった—①バトカ台地への交通路確保が難しかったことと ②ザンベジ川にあるケブラバサ瀑布 (Kebrabasa Rapids) である。(210) ①はポルトガルとの政治的外交交渉がからみ、②は地理的困難を克服しなければならなかった。

バトカは西の大西洋岸からも、逆に東のインド洋岸からも隔たった内陸部に位置していたから、交易と植民のために物資を大量に運べて人的往来も容易な川による交易路が必要だった。しかもアフリカ西海岸とバトカは川で繋がっていなかったから、東海岸とつながるザンベジ川だけが唯一一つのルートだった。ただし東海岸のモザンビークから千マイルを遡る困難な長旅となる。

交易路確保をめぐる第一の障害はここにあった。当時モザンビークを支配したポルトガルの出方が問題だった。イギリスの影響力増大に宗主国は不快だった。内陸部での商業拡大をめざそうとするリビングストンとその背後に見え隠れするイギリス本国は、ポルトガルにとってたんに商業活動をめぐるライバル出現ばかりではなかったから。リビングストンが先頭に立つイギリス側は同時に奴隷貿易廃絶をも目指していた。だからモザンビークの奴隷貿易で利益を上げているポルトガルとしては二重に警戒せざるをえなかったのである。けっきょくリビングストンのザンベジ川探険に不承不承協力を約束しはする。ただし彼が最終的に狙っていたザンベジ川の国際自由航行化は認めなかった。

6年に及ぶザンベジ探険を1858年に始めるにさいし、ひとつめの障害ポルトガルはなんとかしのげたが、もうひとつハードルがあった。ザンベジ川にあるケブラバサ瀑布である。(ジール 210) 大きな岩が3カ所ほども水面に飛び出していて水位も浅かった。だから大きな船の運航が難しい。では小さな船はどうかといえば、リビングストン

には10馬力の小型船があるにはあったが、低馬力で急流を越えられない。この瀧が最大のネックとなり、探検家は「バトカ台地」を諦めざるを得なかった。

最初の候補地はこうして最終的には地理的条件で放棄された。さて二番目の候補地は今度はポルトガルよりもイギリス本国政府との関係で不成功だった。これが「シャイア高地」である。ザンビア、タンザニア、モザンビークと国境を接する現在のマラウイ共和国にあり、シャイア川渓谷に広がる7300平方キロの高原地帯である。海拔1~2千メートルほどで、バトカ台地同様気候がよく白人入植や商業施設建設にはうってつけ。しかもほとんど現地住民がおらず、したがって移住者とのトラブルが起きにくい土地だった。

リビングストンはイギリス政府高官に働きかけて白人入植者を送って欲しいと呼びかけるが、政府は応じない。帝国主義的植民地建設事業はリビングストン死後10年後には活発化しはじめるが、当時のイギリス政府はかならずしも積極的ではなかったのである。だからザンベジ探険のためにと五千ポンドが探険隊に提供されはしたが、植民地建設のための具体的資金援助はなかった。そもそもリビングストンの要請に基づいた自国民入植計画にも乗り気ではなかった。

将来のイギリス植民地候補地への旅を核とするザンベジ探険は、こうしてリビングストンがリバプールを1858年3月に発ってから64年に帰英するまで6年に及んだにもかかわらず、めぼしい成果はないまま逆に多くの犠牲者をだして終わった。有島版『傳記』ではわかりにくい、「理想の聖人」のこうした裏面をうかがわせるのが新しい伝記であり、最後にそのあたりをまとめておこう。

62年にはイギリスから夫を追ってやって来た妻メアリが死ぬ。それだけではない。中央アフリカへの伝道を熱っぽく要請するリビングストンの活動が功を奏して、イギリス国教会の司教チャールズ・マッケンジー¹¹⁾をリーダーに「大学宣教団」が61年にシャイア高地にやってくるが、1

11) ケンブリッジ大学教授で神学と数学を教えたという。(ジール 237)

年ほどで赤痢や下痢熱病でマッケンジー（享年37歳）自身と結婚まなしの若い同僚（有島の言う「バラワブ」¹²⁾）が死んでしまう。

中央アフリカの風土が主因となった犠牲者は、それまでもリビングストーン主催のザンベジ川探険に協力するためやって来た宣教師団のなかに、すでに出ていた。探検家の要請に応じてロンドン宣教会（the London Missionary Society）から合計二つの宣教師団がマコロロ族（the Makololo）とマテベル族（the Matebele）に送られたのは1860年のことという。そのマコロロ宣教師団を悲劇が襲う。送られたのは宣教師夫妻が2組、彼らの子供たちが5人で総勢9名だったが、現地到着後2ヶ月も経たないうちに子供3人を含め6人が熱病で死ぬ。（ジール178）加えてケンブリッジ大学教員で司教だったマッケンジーを失ったのだから、与えた打撃の大きさは想像がつかう。

宣教師団から次々と死者が出て、かつてのビクトリア瀑布のような地理上の発見も果たせず、リビングストーンが約束した綿、砂糖、インディゴ栽培を目的とする入植も夢と消え、もちろん商業拡大もかなわず、果ては現地住民から改宗者ひとりさえも生まなかったザンベジ川探険にたいし、イギリス政府や世論は失望する。（ジール271～2）本国での当初の熱も冷め、この探険が失敗に終わった1864年以降、探検家は支持を失った孤独な探険を死に至るまで続けるしかなかった。

「宣教師団」をめぐるふたつの伝記

宣教師団に起きた人的被害にたいし、ふたつの伝記がどうアプローチしているかを比べよう。ジールのものは ①リビングストーンの人柄について一定の距離を置いてかたるので批判的な評価が散見され ②探検家がかかわった（かかわらざるを得なかった）中央アフリカ部族社会の実態紹介にも多くのページを割いており ③したがって、広い社会的歴史的視野をも採り入れたリビングストーン像やザンベジ川探険評価が得られる、ということになろう。

いま紹介した1862年マッケンジーの死を補足

してみよう。有島の説明にしたがえば、マッケンジーは「シレーイ河に出づ可き逕路を拾わんとして、旅行しつゝありし間、其船轉覆して薬籠強壯劑等、皆水底の者となり、マッケンジーは蚊軍の為に苦しめられ、濕潤の為に難され、云う可からざる苦境に沈淪しつゝ、僅かにルオの河口に達せしとき、忽熱病の襲ふ所となり、三週間にして死し、バラワブも亦同時に、赤痢に罹り、マコロロ人に擔はれてマゴメルに達せし時、之れ亦尋で幽界の人とな」った（7『傳記』164）という。さきほど紹介したふたりの死については、これだけしか書かれていない。結果だけしか語られないので、読者には詳細が分からぬままである。もちろん有島が書くように蚊と熱病、赤痢が直接の原因ではある。だが、そうした状況になぜふたりが置かれたのか、リビングストーンとのかかわりについて多くが語られていない。

1862年元旦、ふたりの宣教師はシーレイ河とルオ河の合流地点でリビングストーンと落ちあう予定だった。だがシーレイ河を下る旅は雨期で困難を極めたために10日ほど遅れてしまい、探検家とは約束日には出会えなかったのである。ふたりは仕方なく現地部族から提供された粗末な住まいで貧弱な食事や蚊に悩まされながら待つしかなかったのである。

いっぽう宣教師たちが、こうしてリビングストンの帰りを数週間一日千秋の思いで待ちわびていたあいだ、彼の心を占めていたのは宣教師たちへの気遣いよりは、むしろイギリスから運ばれてくる「レイディ・ニャッサ号」を予定通りにザンベジ川のコンゴーン河口で受けとることができるかどうか、という点にあった。この分解式組み立て小型船は探検家が帰英したさい自費で買い込んだもので、リビングストーンがシーレイ河を遡ってニャッサ湖を探険するための必需品だったからである。（ジール248～9）ザンベジ川探険にかけたリビングストンの執着がうかがえる。優先順位は宣教師たちよりも、あくまで目的完遂だった。ジールの自伝が繰り返すキーポイントである。

1862年1月末にはマッケンジー、2月22日に

12) Henry Burrup のこと（ジール248）

は「バラワブ」が他界する。若くて人なつっこいマッケンジーを気に入っていたリビングストーンは、ふたりの死を残念には思った。だが司教個人の死を嘆くというよりも、エリート大学宣教団を襲った悲劇がイギリス本国の世論に悪影響を与え、世論の支持を背景として進められてきたザンベジ川探険への関心を冷却し、そして最後にやってくるであろう自らの名声への打撃をこそ、リビングストーンは案じた。事情をよく理解しない人びとは、ふたりに死に追いやった責任を探険家に負わせようとするだろうし、気候が悪いルオ河でのふたりの死と「シャイア高地」とを短絡させるだろう、と考えたのである。シャイア高地というのは入植と商業施設建設にふさわしい地ではなく、未開で恐ろしい中央アフリカの一部にすぎない、というイメージをもってしまっただろう、とリビングストーンは怖れた。万事休すである。そう考えたリビングストーンが、ふたりの犠牲者—特に司教—にたいして苦い思いをだいたとしても不思議ではなからう。「マッケンジーが健康のことをしかるべく注意していれば、死ななかつただろう」というのが、親しい多くの友人に宛てた手紙のなかでリビングストーンが繰り返した言葉だ、とジールはかたる。(ジール 255)

大学宣教団の悲劇にたいする反応は、ザンベジ川探険にかかる探険家の妄執とも云うべきこだわりを感じさせる。そのさい、わが身に起きた困難をめぐりイギリス本国を念頭において対処せねばならない必要性を認識する現実感覚がリビングストンのなかに強く働いていることは見逃せない。宗教家であることは、彼の場合同時に政治的計算(打算)とも表裏一体となっていたことを 21 世紀の伝記はかたる。神の国建設を一義的にめざす人物を支えるのは、実は地上の国への現実的配慮なのである。有島によればマッケンジーの死をまえに、探険家は悲嘆に暮れたように書かれているが、かならずしも心優しき聖人に祭りあげればリビングストーンという人物を描ききれるというものでもなかつたのである。

妻メアリの死

妻メアリと夫たる探険家のあり方をめぐって

も、有島とジールの伝記は理想化された「聖人」と現実の信仰者との微妙なズレを浮き彫りにする。メアリについて有島は「貞操勤勉にして、愛情泉の如く、よく此偉大なる基督の僕の半身たるに堪へた」(7『傳記』166)と激賞している。夫のために献身的に働く妻の鏡というところ、典型的な良妻賢母である。だがジール自伝を読むと、これは理想化された聖女像だと言わざるを得まい。1845年に結婚後コロベンにふたり揃って家庭を営み、カラハリ砂漠を夫に従って横断した頃はいざ知らず、そののち 20 年近くを経てザンベジ川探険に自ら参加すべく 1862 年 1 月末に夫と合流した頃の姿ではなかつたようである。ジール自伝がかたるのは、ややもすれば家庭を顧みずに子供たちとも疎遠でアフリカ宣教と探険に没頭する夫とのすれ違いに苦しむ、赤裸々な女性の姿である。

妻を失った日の探険家の悲しみと喪失感について、ジールは感動的な筆致で語っている。(ジール 260~1) だがこのときのように、妻をめぐる探険家が涙するのはまれだったらしい。妻の死に至るまでの歳月をかたる際にジールが繰り返すのは、妻をひとりの女性、ひとりの人間として探険家がかならずしも大切に思っていたわけではないことである。

探険家とメアリのあいだには、結婚当初からコミュニケーションが不足しており(ジール 61)、ひとりの女性、対等のパートナーとしての妻への愛情と理解というよりは、宣教師の妻が備えるべき資質と役割をこそ第一義的に探険家が考えていた、とジールは言う。だから将来の妻に女としての魅力を感じなくても探険家にとっては重要ではなかつた。宣教師になろうとする友人へ、妻をめぐる次のようにアドバイスしたほどである—「容貌は地味で常識的女性、ロマンチストはダメ。わが妻はまことにレイディで、小柄で髪は濃い黒、頑丈で自分にはピッタリ」(ジール 60)と。常識的で健康に恵まれた女性が「理想」だというのである。健全ではあるが。

リビングストーンがプロポーズしたのは 1844 年、31 歳のときだった。現存するふたりの手紙を資料として用いることのできたジールの解説を読む

と、婚約相手にたいして若者たちがいだけ甘い感情が互いに抜け落ちているのがわかる。アフリカの僻地で交際相手も限られていたふたりにすれば、選択の幅も狭かったが。ふたりの共同生活を「便宜的結婚」（59）とまで言うジールは、この時期「無関心にも似た無味乾燥さで、リビングストーンはさし迫った結婚を論じた。」（60）と形容している。有り体にいえば、宣教師たるものは妻をめとり家庭をもっていないと仕事のうで人びとの信頼を得られない、だから宣教師の先輩たるモフィットの娘を選ぼう、という、まずは大人の知恵とも言うべき常識（計算）が働いていたのである。

青年有島が崇拜する「人並み外れた意志と実行力をもつ人」には、とうぜんながら特有の難しさがある。妻、子供たち、同僚の宣教師たちなど自分を取り巻く身近なヨーロッパ人との関係については不安定だったいっぽうで、探険家はジールに言わせればアフリカ人には概して優しく関係もよかった。「妻の立場を自分より劣った者」（384）とみなし、子供たちと遊ぶ時間はほとんどなかったし、仲間のイギリス人についても、過去に自分を助けてくれた人びとにたいしてさえ、ささいなことで必要以上に不信感をだいたり憤ったりした。「ヨーロッパ人の指導者として彼は優柔不断、気まぐれで不公平だった。」（ジール 385）というのである。

こうして新しい情報に基づくリビングストーン伝を参照しながら、有島の『傳記』をふりかえると、探険家が22、3歳の有島（と森本厚吉）自身を映し出す鏡になっているのが改めて確認できる。ジールを読むかぎり、探険家は偉大ではあっても人間的欠陥をやはりもっている。だが、そうした人間としての欠点青年たちにはみえなかつ

た。

「明治40年代の青年、あるいは知識階級というようなものは、いままでの人たちがもっていたいろいろな幻というものを捨て去る世代の青年」（中村光夫『明治・大正・昭和』43）だった、と言われる。有島もまさにこの世代に属してはいる。だが「理想の聖人」をめざせ、とする古めかしいサムライ道徳は維新後も、西洋舶来のキリスト教と融合して生き延びていたことを『傳記』はかたる。徳川時代の亡霊は健在だった。当時の日本人一般にすればリビングストーンといういかにもハイカラな人物を紹介しながらも、『傳記』はあらためて明治という時代がもつ前時代との隠微な連続性を垣間見させる。

参考文献

- 有島武郎『有島武郎全集』筑摩書房 1979～88年
内村鑑三『余は如何にして基督信徒となりし乎』岩波書店（岩波文庫）2017年
蝦名賢造『札幌農学校－日本近代精神の源流』新評論 1991年
大石慎三郎『江戸時代』中央公論社（中公新書：476）1977年
加地伸行『儒教とは何か－増補版』中央公論新社（中公新書：989）2015年
カスール、サムエル著（向井元子訳）『アフリカ大陸歴史地図』東洋書林 2002年
久山康『近代日本とキリスト教 明治篇』基督教学徒兄弟団発行（発売元：創文社）1956年
土田健次郎『儒教入門』東京大学出版会 2011年
ジール、ティム『リビングストーン』s改訂増補版 イェール大学 2013年
(Jeal, Tim *Livingstone: Revised and Expanded Edition* Yale University Press)
中村光夫『明治・大正・昭和』岩波書店（同時代ライブラリー：258）1996年
夏目金之助『漱石全集』岩波書店 1993～97年